

10. 飼育相談

吠える・引っ張る・トイレがうまくできないなど、譲渡後の動物に関して電話や来所による相談があった場合には、適切な対応（その場でのアドバイス、専門家の紹介、情報提供など）をし、問題が深刻化しないよう、そして飼育放棄につながらないようにしましょう。



飼育相談を行う前に

① どんな相談が多いか、現状を把握しておく

外飼いの犬が多いか、集合住宅が多い地域か、猫の飼育スタイルはどんなものが主流かなど、各地域の動物の飼育状況によって、相談の内容は違ってきます。これまでに寄せられた相談の内容を整理し、現状を把握しておきましょう。よく寄せられる相談には、答え方の基本フォーマットを用意しておくのもよいでしょう。

譲渡後によくある相談（適正譲渡講習会出席者へのアンケートから）

	よくある相談
犬	無駄吠え、興奮、引っ張り、飛びつき、噛み癖、脱走、トイレ、先住動物との関係、なわばりの主張、食事の量、怖がり、留守番、特定の人にしかつかない、落ち着きがない……
猫	トイレ（猫の場合は、ほとんどがトイレに関するもの）、人へのじゃれ噛み、興奮……

② 常に情報収集する

動物の飼育方法、行動学などについて、積極的に学ぶようにしましょう。現在は動物に関するセミナーやワークショップ、研修会が数多く開かれています。一般の飼い主にも分かりやすく書かれた飼育本や簡単な行動学の本も出版されていますし、インターネット上にもさまざまな情報があります。ただし、数多くの情報を集めるうちに、いったい何が正しい方法なのか途方に暮れる場合もあるでしょう。その際には、行政が飼い主に指導する際の基本「その方法は人にも動物にも安全か」という視点を思い出してみてください。

③ スタッフ間で意見を統一しておく

スタッフによって相談に対する答えがバラバラだと飼い主は混乱し、センターに対する不信感が生まれることもあります。たとえば「トイレを覚えられない」という子犬の相談に対して「タイミングをみてトイレに誘導し適切な排泄場所を教えましょう」というような最新の行動学に基づく方法をアドバイスするスタッフもいれば、「粗相をしたときは、新聞紙を丸めてお尻を叩くといい」と昔信じられていた方法をいまだに指導するスタッフがいたのでは、相談者は混乱するばかりです。

こうした状況を避けるためには、スタッフの勉強会を定期的に行うのがいいでしょう。外部からしつけインストラクターや獣医師など専門家を呼んでレクチャーを受けるのもいいですし、スタッフが自分で学んできたセミナーやワークショップの報告をするのもいいでしょう。

スタッフが何人かいるならば、犬のしつけ相談担当、健康相談担当、猫の担当といった具合に専門分野（得意分野）を決めるのもいいでしょう。それぞれに興味のある分野を割り当てれば、おのずと知識習得に力が入ります。

④ 自分たちに答えられる範囲を決めておく

職員は、トレーニングのプロでもありませんし、問題行動の専門家でもありません。複雑化した問題に対して、すべてに答えられるわけではないのだと認識しておきましょう。手に負えない問題に、安易に不適切なアドバイスをしたことによって、問題が悪化することもあります。まずは、自分たちが答えられる範囲を把握し、それ以上は専門家を紹介するという判断が大事でしょう。

特に深刻な問題行動で悩んでいる飼い主には、適切な紹介先を示し、飼育放棄まで進まないよう迅速に対応しましょう。

⑤ 適切な紹介先を把握しておく

行動治療の専門家、インストラクター、トレーナー、獣医師など、地域にどんな専門家がいるか、情報収集をしておきましょう。中には遠方であっても協力してくれる人もいます。口コミやインターネット、専門誌などで調べてみましょう。実際に相談者に紹介する前に、職員自身がその専門家と話をし（時にはレッスンを受けてみて）その手法を理解しておくのもいいでしょう。相談者にすぐに紹介できるように、専門家リストを作ってみてはどうでしょうか？



吠えないようにトレーニングする？ 吠えない場所に犬を繋ぐ？

～行政の飼育相談でアドバイスできること～

飼育相談で最も現実的なのは、動物のおかれている環境や、動物に対する飼い主の態度・行動を変えるアドバイスをすることです。

たとえば、玄関先に繋がれている犬が通行人にワンワン吠えるのであれば、繋ぐ場所を裏庭にして犬から通行人が見えないようにする……それが最も簡単で現実的な解決策です。犬が吠えないようにトレーニングするというよりも、ずっと早く問題は解決します。

行政職員は、トレーニングのプロでも問題行動の専門家でもありません。また、相談してくる飼い主も、何日も何週間もかかるトレーニングプログラムをやりたいわけではないでしょう。

「簡単にすぐに」解決するアドバイスを求めている飼い主には

- 動物のニーズを満たすこと
- 飼い主がうまく問題を管理すること

この2点を基本に相談を受けましょう。寄せられる問題の多くは、飼い主が意識や行動を変えることでずいぶん改善されるものなのです。



飼育相談のSTEP

犬の吠えや散歩の問題、猫のトイレ問題など、動物の問題行動に関する相談の場合は、以下のような流れで相談を進めていくといいでしょう。

問題を聞き取る

飼い主の話の中から問題を具体的に聞き出し、明確にします。たとえば、「外飼いの犬が吠えて困る」ということでも、「誰に対して吠えているのか、吠える時間帯はいつか」などで原因も、対処方法も違います。動物を連れて来所しての相談なら、実際の動物の様子も見てみましょう。

確認

以下の3点を中心に、飼い主に確認しましょう。

Check1 飼育状況（ニーズが満たされているか）を確認する

動物が動物として幸せに生きるために必要なこと（ニーズ）が満たされていないと、「人間から見たら」困った問題行動（吠える、いたずらするなど）が出てしまいます。飼い主から相談が寄せられたら、まずは、動物のニーズが満たされているかを確認しましょう。満たされていないということは、犬の生活の基盤がマイナスである、ということです。これをまずは最低限でもプラスに変えることで、問題が解決する（あるいは軽減する）ことが多くあります。

また、飼育状況を確認すると、問題の原因が見えてくることもあります。

Check2 飼い主が求めるゴールを確認する

たとえば吠える問題の場合、「とにかく今、すぐにやめさせる方法を知りたい」のか「近所から苦情を言われないようにしたい」のか「吠えない犬にしたい」のか、飼い主の希望するゴールのイメージによって、いま伝えるべきことも変わってきます。

Check3 飼い主のタイプや環境を確認する

どんなにいいアドバイスでも、飼い主にできることでなければ意味がありません。

問題を解決するには引っ越したほうがいい、と言われても、犬だけで留守番する時間を短くするためにパートをやめたほうがいい、などと言われてもほとんど無理です。

飼い主の住環境や、生活スタイル、また体力なども考慮に入れて、「飼い主ができること」をアドバイスするために、家族構成やいつも世話をする人のことなども確認しましょう。

アドバイス

ここまで確認してきたことを頭においた上で、「飼い主ができること」をアドバイスします。

A ニーズをしっかり満たすようにアドバイス

たとえば、エネルギー発散が足りず退屈もあって吠えているだろうと思われるなら、散歩や遊びを増やしてもらうように伝えましょう。具体的に、朝は出勤前に誰が散歩に行けるか、夕方は庭でボール遊びをしてから散歩に行けないか、など一つ一つ「これならどうですか？」と提案し「できそうだ」ということをやってもらうように伝えます。

B 問題を起こさないよう管理する方法をアドバイス

外飼いの犬を繋ぐ場所を変える、吠えやすい時間帯だけ家の中に入れるなど、うまく管理をすることで、吠える問題を起こさないように予防することができます……これが、管理という考え方です。

このアドバイスも、飼い主にできるかどうか確認しながら勧めてください。「家の前を通る通行人が多い朝の時間帯だけでもおうちに入れられませんか？玄関のドアノブに繋いで、タタキに一枚毛布でも敷いてやったらおとなしくしていられますか？」など具体的なアイデアを示し、「それならできる」という妥協点を見つけましょう。

また、近所からの苦情が心配というなら、一度挨拶に行くことを勧めてみましょう。

「吠えてご迷惑をおかけしてすみません、なるべく吠えないようにセンターにも相談しているところなので、もう少しお時間を頂けますか？よろしくお願いします」と挨拶をしておく、いきなりのご近所トラブルにはなりにくいものです。

C 専門家を紹介する

問題が非常に深刻で安易に答えられないような場合、またしっかりトレーニングしたほうがいいだろうと思われる（飼い主自身にもやる気がある）場合、専門家を紹介します。

アフターフォロー

アドバイスをしたあと、その後の経過を後日電話などで報告してもらえるといいでしょう。アドバイスを実践してもらって2週間後に電話をもらう、あるいはこちらからかけるなどをしてフィードバックを受けるのは、自分たちにとって励みにも勉強にもなります。

飼育相談のアドバイス

ニーズをしっかりと満たすようアドバイスする

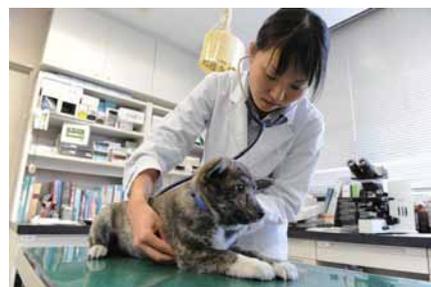
動物がいきいきと生活するために必要なこと（ニーズ）を、飼い主がしっかりと満たしてあげることで防げる問題がたくさんあります。犬、猫それぞれのニーズをリストにしました。飼育相談の参考にしてください。

■ 犬のニーズ



体の健康

- 予防できる病気は予防する
狂犬病予防接種・混合ワクチン・フィラリア予防・
内外部寄生虫予防
- 毎日の健康チェック～異常の早期発見
- 定期的な健康診断
- 適切な治療
- デンタルケア
- 不妊去勢手術



体の健康が保たれていなければ、さまざまな問題が起こります。たとえば、痛みがあればイライラし不安症状や攻撃行動が出る場合もあります。困った行動が出たら、まず最初に身体的な問題がないかどうかをチェックしましょう。普段と違うことはないかよく様子を見て、おかしいことがあれば動物病院で診察を受けましょう。

また、「性的欲求」によって起こる問題行動（攻撃行動、脱走など）もあります。本来性的欲求というのは犬の自然なニーズですが、現代社会で人間と共に暮らしている犬に、これを自由に満たしてやることはできません。それならば、早期に不妊去勢手術を行い、性的欲求が満たされない故のストレスや問題行動を予防したほうがいいでしょう。

このニーズが満たされていないと

例1) 膀胱炎によって排泄の回数が増え、それが引き金で排泄の失敗が増える。

改善策

定期的な健康診断、また、いつもの様子と違うなら獣医の診察を受ける。



例2) メスの場合、発情期にモノ守りがひどくなる、人に攻撃的になるということもある。

またオスの場合、メスの発情期のおおいに惹かれて鎖を引きちぎって脱走したり、食事を取らなくなったり、そのイライラから人に攻撃的になったりすることもある。

改善策

早急に不妊去勢手術を実施する。



快適な生活空間

- 安心して休める寝場所を用意する
- 適切な排泄場所を用意する
- 生活空間を清潔に保つ
- 環境を整備し危険を取り除く
- 安全で適度なスペース、居場所を作る



住環境は生活の基盤です。室内飼いで、外飼いで、犬が快適に過ごすことができるように整えてやることで、さまざまな問題を予防、軽減できます。

安心して休むことができる場所があれば精神的に安定し、吠えや不安による行動が減りますし、適切なトイレの場所を用意すれば排泄の失敗も防げます。いたずらされて困るものを犬に届かないところにしまえば、危険もいたずらも予防できます。

また最近では、室内にサークルで囲った犬の居場所を作り、そこだけで生活させる飼い主もいますが、本来犬は狭い場所に閉じ込めて飼う動物ではありません。狭い場所に閉じ込められればなすとストレスとエネルギーをため込み、よく吠えるようになったり、部屋に出ずとすごい勢いで走りまわったりするようになります。留守番のとき以外は頻りにサークルから出す、留守番が長いならサークル内を広くし環境を豊かにするなどの工夫が大事です。

このニーズが満たされていないと

例1) 外の犬小屋に雨が入る、風が入る、外を通る人から丸見え、というような環境だと安心してしっかり眠ることができないので、常に精神的に落ち着かずひどく吠えたりすることがある。



改善策

暑さ寒さ調節（入口に風除け、毛布、日陰に移動、よしずをかける、周りに打ち水など）広さをキープ（繋がれている鎖が短すぎないか、絡みつかないか、犬小屋（檻）の大きさ）、周りから見えない場所へ移動、ついたてを建てるなどで落ち着ける環境へ。

例2) 室内飼い。一日中留守番をしているサークルが狭すぎることで、吠え、食糞、トイレの失敗につながる……

改善策

ケージサークルの大きさを適切なものに広げる。サークル内のトイレと寝場所をはっきり区別し、遠くに置く。

サークルの置き場所を確認（日光が当たり続けていないか？暑さ・寒さは大丈夫か？外が丸見えでないか？ジメジメと湿気はないか？また、洗面所にサークルを設置すると落ち着くことができません）。

サークル内におもちゃやコングを入れ環境を豊かにする。



バランスの取れた食事と新鮮な水

- 個体に合わせた食事量
- 栄養バランスの取れた食事
- 犬が食べると危険なものを避ける
- いつでも新鮮な水が飲めるようにする



健康を維持できる食事を与えるのは当たり前ですが、内容や与え方にも工夫をしましょう。

食事量： 市販のフードの袋に書かれている体重に合わせた量を基本としますが、食べ残したり食べ過ぎて少し下痢をするなどであれば、様子を見て加減しましょう。同じ量を与えていても、太る犬もいれば痩せる犬もいます。肥満は生活習慣病の原因になりますし、痩せすぎもよくありません。

食事の回数： 子犬は胃が小さく一度にたくさんは消化できず下痢をしやすいものです。生後2カ月までは一日4～5回、6カ月までは一日3回、その後朝晩2回と移行していきましょう。また食事の時間をきっちり定時に決めすぎると、その時間に与えられないときの要求吠えなどにつながることもあります。

また、食事をしているときに小さな子供が邪魔をするような環境や、食事量が極端に少ないと食事（資源）を守る行動にもつながるので、注意。

もちろん、犬が食べると危険なもの（玉ねぎなどのネギ類、レーズン、チョコレートなど）にも気をつけましょう。

このニーズが満たされていないと

例1) 栄養のバランスが取れた食事を適量与えないと体調を崩し、下痢などから排泄の問題が起きることもある。

改善策

獣医師とも相談の上、個体にあった栄養バランスの良い食事を与える。

例2) 成犬の場合でも、一日に食事が一回では、空腹な時間が長くイライラしたり食事を催促して吠えたりすることもある。

改善策

朝晩2回の食事に変える。一日の給餌量を、2回の食事時間だけではなく、しつけのごほうびや、留守番の際にコングに詰めるものとして使うこともできる。あつという間に終わる食事ではなく、食べることを楽しめる。

例3) サイフォン式やペットボトルをさかさまにして使う給水器具。水が少しずつしか出ないので、飲水量が減り、脱水症状を起こしたり、水分が足りず尿を舐めるようになること等が考えられる



改善策

給水器具は留守番のときの補助として使用し、基本はステンレス容器などでたっぷり新鮮な水を与える。





運動欲求

- ・エネルギーの発散
- ・本能（噛む欲求、においを嗅ぐ欲求）を満足させる



本来犬には、狩りに出たり羊を追ったりという仕事があったわけですが、現代の犬は仕事もなく退屈でエネルギーをもてあましています。適切にそのエネルギーを発散させないと、犬は自分で仕事を勝手に見つけます。たとえば室内で大運動会をしたり、インタフォンの音に反応して吠えたり、庭を掘り起こしたり、散歩のときにひどく引っ張ったり、ということになり、それが人にとっては問題になるのです。十分にエネルギーを発散させ、問題を予防しましょう。

欧米には「疲れた犬はいい犬」という表現があるほどです。留守番の前にたっぷり運動をさせることで、留守中静かに寝ていてくれます。

また「においを嗅ぐ」といった犬の本能を、きちんと満足させてやるための遊びや散歩も工夫しましょう。においを嗅ぐのは犬にとって大事な情報収集であり、脳への刺激ともなります。「かじる」のも犬の本能。かじっている物を与えておかないと、人にとって大切な物をかじられてしまいます。

このニーズが満たされていないと

例1) 特に、活動的な子犬や若い犬の場合は、しっかりエネルギーを発散させないと以下のような行動が起こる。

- ・家の中を走りまぐる、暴れまぐる
- ・散歩のときにすごく引っ張る
- ・いたずらがひどい（庭を掘ったり、人に飛びついたり）
- ・吠えがひどい

改善策

たっぷりエネルギーを発散させる（エネルギーの発散のページ参照）

例2) 噛んでよいおもちゃを適切に与えないと、家具やスリッパなど、噛まれては困るものをいたずらする場合がある。

改善策

適切な噛むおもちゃ、長く持つおもちゃを与える





社会的なかかわり

- 飼い主とのスキンシップ
- 他人や他犬との適切な触れ合い
- 子犬の場合、適切な社会化



犬はもともと仲間と共に暮らす社会性の高い動物です。家族の一員として、たっぷりとコミュニケーションをとってあげましょう。

他の人や犬とのふれあいを好む犬ならば、そういった機会を増やしてやりましょう。

日常的に十分に飼い主や他犬、他人と触れ合い、それらが当たり前になり、良い経験を繰り返している犬たちは、他犬や他人を見て過剰に興奮して吠えたり、極端な恐怖反応や攻撃行動を見せたりしにくいものです。

子犬の場合、こうした社会化が適切に行われると、将来起こりうるさまざまなリスクに対応できるようになります。

ただし、すでに成犬で、他人や他犬を怖がるタイプには、慎重に接してやる必要があります。

犬にも個性があり、犬付き合い・人付き合いが苦手なタイプもいるのです。そうした犬の場合は、積極的に触れ合うというよりも、「さまざまなものを見ても平常心でいられる」ことを目標にしましょう。

このニーズが満たされていないと

例 1) 外飼いで、ひどく吠えたり、人が近付くと過剰に興奮し飛びついたり激しくじゃれたりするのは、食事を与える以外、犬と触れ合うことがまったくない飼い主に飼われている場合が多い。



改善策

犬と触れ合う時間を多くする。外飼いで、窓から室内が見える位置に犬小屋を置いたり、朝晩散歩に連れ出す、遊んでやる、などをすることで、犬は精神的に安定し行動も落ち着いてくる。

例 2) 新しい環境や人を怖がり、慣れるのにとても時間がかかる。

社会化期に適切な社会化が行われなかったのも原因と考えられる。

改善策

社会化期を過ぎても、さまざまなものに慣らしていくことは可能。

犬の苦手なことは無理強いをしないで、おやつなど好きなものを使い、慎重に時間をかけて慣らしていく。

(しつけインストラクターを紹介し、さまざまな物や事に慣らす方法を習うよう勧めるのもいいでしょう)



猫のニーズ



猫の
ニーズ

健康管理

- 予防できる病気は予防する
- 健康診断・適切な治療
- 不妊去勢手術

獣医療の進歩と共に昔は防げなかった病気もワクチンなどで予防でき、猫の寿命は伸びてきています。しかし猫には、犬に比べてワクチンで防げない感染症も多いので、室内飼育はその予防のためにもお薦めです。

普段から猫の様子をチェックし、何か少しでも体調の変化に気付いたら、すぐに動物病院で診察を受けましょう。特に、食事をまったく取らない、尿が出

ていない、尿の様子がいつもと違う、ということがあればすぐに相談をしてください。

不妊去勢手術も、病気の予防という観点からも、不幸な動物を増やさないという意味においても必要不可欠。28ページを参考にしてみてください。



猫の
ニーズ

快適な生活環境



- 自由に動き回れる空間
- 上下に移動できる段差のある環境
- 安心して休める寝場所
- 不安を感じたときに隠れる場所

■室内でも十分飼える！

交通事故や感染症などのトラブルを避けるためにも、現在、多くの専門家が猫の室内飼育を推薦しています。ただし、ただ部屋の中に入れておけば良い、というわけではなく、猫の欲求を満たすような生活環境を整える必要があります。ある程度のスペースに、上記のような生活環境の条件が整えば、室内だけでも満足してくれる生き物なのです。

<室内飼育のメリット>

- 1：交通事故の危険回避
- 2：感染症の予防
- 3：連れ去り、いじめ等、虐待からの回避
- 4：故意による毒物による中毒死や散布された農薬による中毒死の防止
- 5：行方不明の防止
- 6：排泄物等によるご近所トラブルの防止



■隠れ場所

特に、猫は本来とても臆病な動物なので、何か不安を感じた際にすっぽりと身を隠せるような場所が必要不可欠です。そうした安心できる場所がないと、猫は神経質になりやすく、飼い主になつきづらくなったり、

恐怖による攻撃を誘発したり、排泄の失敗につながることもあります。段ボールやバスケット、猫用のベッド等を、猫が出入り可能な各部屋に最低でも一つずつは用意してやると良いでしょう。設置場所はタンスや本棚などの上、そして人の視線が届かない場所がお薦め。快適な寝場所にもなるはずです。

■上下運動

また、猫は立体空間の移動や、複雑に入り組んだスペースの移動を好みます。部屋の中の家具の配置を考えて、猫が上下運動できるよう工夫してみましょう。あまり背の高い家具がない家では、猫用に市販されているキャットタワーを設置してもらうのも良い方法です。

上下運動ができると、猫は自らある程度エネルギーを発散できます。多くの若い猫は非常に活発で、じゃれつきや家の中を過剰に興奮して走り回るなどの行動がよく見られますが、猫としてはとても正常なこの行動も、飼い主にしてみれば、困った問題。深夜に部屋の中で運動会が始まったり、過剰にじゃれつかれてしまったりするという相談も多いですが、そんなときは、まず上下運動が可能な室内環境をしっかりと整えてあげてください。





バランスの取れた食事 と新鮮な水

■食事の内容

猫は犬に比べはるかに肉食傾向が強く、より多くのタンパク質や脂質が必要な動物です。現在では多くのキャットフードが市販されていますから、基本的にはこれを上手に取り入れ、猫の主食にするとよいでしょう。手作りで猫のご飯を作る際にも、キャットフードを使用する際にも、各猫に合わせた健康を害さないバランスの取れた食事を与えるよう、心がけましょう。



■複数頭の場合

猫を複数頭で飼育する場合、考えなくてはならないことはそれぞれの猫の健康管理。

どの猫がどれだけ食べたかを確認するためにも、一頭ずつ別々の食器で食事を与えることをお勧めします。

- 個体に合わせた食事量
- 栄養バランスの取れた食事
- いつでも新鮮な水が飲めるようにする

通常は同じフードを食べていても、病気療法食が必要となったり、年齢差が離れている場合にはライフステージ別のフードを食べる時期が来るので、最初から別々の食器で食べさせることに慣らしておきましょう。他の猫の食べ残しを別の猫が食べ肥満につながるといったことを予防するために、食器だけではなく、食べる場所も一頭ずつ分けたほうが良い場合もあります。



■新鮮な水

猫は本来、水の少ない砂漠地帯で家畜化されてきた背景から、水をあまり積極的に飲もうとしない傾向が強くなります。とはいえ、水分を十分に摂取しないとさまざまな病気を引き起こす可能性があります。なるべく多くの水を飲んでもらえるよう工夫しましょう。たとえば、水を入れる容器は陶器や磁器でできている物の方がプラスチック製の物より好むようで、水の摂取量が増えることが多いようです。いつでも新鮮な水が飲めるよう、猫が飲みやすい場所に用意してやりましょう。



運動欲求・捕食行動 を満足させる

猫を室内飼育する際の唯一のデメリットは、猫が退屈しやすいことです。



特に若い猫たちは捕食行動が非常に激しく、刺激の少ない室内では動くものが飼い主の体しかないので、飼い主にじゃれつきます。引っかけられたり、甘噛みで悩む飼い主さんは少なくありません。

猫を室内飼育にするのであ

- しっかりと遊ぶ
- 生活に刺激を与える

れば、しっかりと猫と遊ぶ時間を作ること。また部屋の中に時々新しい刺激を加えるのもいいでしょう。いろいろな段ボールや紙袋（持ち手は猫に絡むと危険なので外しましょう）、猫草など、猫にとって安全なものを置くことを考えましょう。室内飼育されている猫たちの捕食行動を満足させるおもちゃや遊びは57ページで詳しく紹介しています。





本能を満足させる

■マーキング

猫は自分のなわばりや気に入ったものに対して、さまざまな印をつけます。その印の多くは「におい」。体のあちこちにある臭腺から体を擦り付けることにより、においを残します。家具や壁の角などに頬や体をこすりつけているのは、このマーキングという行為。また、爪を研いだ跡を残すこと、尿をかけることでも自身の存在を主張することがあります。

尿マーキングの多くは去勢手術で改善されますが、体を擦り付けることや爪研ぎを完全になくすことは不可能に近く、室内にある程度こういった欲求を満たせるものを置いてあげる必要が出てきます。



■爪研ぎ

爪研ぎは適切な物がなければ、室内の適当な場所（壁や柱やソファなど）が格好の餌食になります。

今はさまざまな猫用の爪研ぎが市販されていますので、色々な素材の物をいくつか用意し、その猫の好みに合わせて設置してみてください。

設置する際には床に直接置くだけでなく、壁面に貼り付けるなど縦に設置し、猫が背伸びをしながら爪が研げるようにしておくのも大切なポイントです。

そういった爪研ぎを各部屋に2個以上設置しておく、家具などへの爪研ぎ被害は少なくなるはずで

- ・顔や体でのマーキングができる場所
- ・爪研ぎができる場所

■爪切りに慣らす

猫はもともと捕食性の動物。獲物を捕るため常にすどく爪を尖らせておく必要があり、頻りに爪を研ぐ傾向があります。古い爪の鞘を外し、より獲物が捕りやすい新しい爪にするのです。

しかし、現代の室内で飼われる猫は十分な食事を与えられ獲物を捕る必要はないので、子猫の頃から爪切りを習慣にしておくといいでしょう。最初は猫が食事をしている最中に、一日一本、爪を切る習慣を付けてみましょう。嫌がる猫を無理やり押さえ込み一気に全ての爪を切るのは、爪切り嫌いな猫を増やすだけです。食事を邪魔されるのが嫌いな猫は眠そうな時に一本だけ切り、切った後のごほうびとして体をゆっくり触ってあげると良いでしょう。





快適なトイレ環境

- トイレの数、大きさ、砂の種類、清潔さ

猫は非常にきれい好きで、トイレにこだわりがあります。

トイレを教えること自体は犬に比べはるかに楽。特に教えなくてもできる猫も多いですが、トイレできちんと排泄できた時に好物のおやつなどを与えてほめていくことで、確実にすぐにトイレを覚えます。

ただし、トイレ環境のわずかな変化にも敏感で、それをきっかけに失敗が起きやすくなることもありますので、58～59ページを参考に、猫にとっての快適なトイレ環境を心がけてください。



社会的なかかわり

- 飼い主さんとのスキンシップ



単独生活を好むように思われている猫ですが、実は社会性の高い動物です。

室内飼育されている猫の場合は他の社会や動物との接点がありませんから、その分飼い主が毎日コミュニケーションを図り、かまってやる必要があります。話しかけたり、なでたり、おもちゃを使って遊んだりする時間が、室内飼育の猫には特に必要なのです。

それが満たされないと、エネルギー過剰やそれに伴う攻撃行動の発生が問題になります。一人暮らし、もしくは人数が少なく留守がちな家庭で、一頭だけで飼われている室内飼育の猫によく見られる問題なので、注意してください。猫は放っておいても平気、猫は家につく、という概念はもう昔のもの。現代では、犬も猫も人（飼い主）につくのです。

Q5 これまで自由に猫を飼っていた人は、新しい猫についても完全室内飼いをしてくれませんか。理解してもらうにはどのような説明をすれば有効でしょうか？

A 家も外も自由に行き来できる従来の猫の飼い方をしてきた経験のある人に、「完全室内飼い」を決断させるのはなかなか大変です。まずは「完全室内飼い」のメリットを伝えると共に、外に自由に出入られるようにしているとどんなリスクがあるか、事実に基づくアプローチも時には有効です。

下記を参考にしてください。

猫の室内飼いを決断させる 4つの事実！

事実①：交通事故で死亡する猫の数（動物死体収容数の90%が猫という報告も！）

事実の伝え方：

地域の清掃局に年間どれくらいの猫の路上死体を収容するかを確認し、その数を講習会などで積極的に伝え、交通事故のリスクの高さを伝えるといいでしょう。事故に遭った猫の写真を見せる方法もあります。

事実②：感染症の恐怖！

事実の伝え方：

外へ自由に出ることによって病気に感染する可能性があるとは知っていても、その病気がどんなものか、治療にどの程度時間やお金がかかるのか、具体的に知らない飼い主も多いものです。猫免疫不全ウイルス感染症にかかった猫の悲惨な写真を見せたり、治療の苦労、治療費の概算などを具体的に示すといいでしょう。

事実③：ご近所トラブル！（裁判や事件になることも……）

事実の伝え方：

猫の排泄などをめぐって発生した近隣トラブルの実例を伝えましょう。ご近所の関係がぎくしゃくしたという程度から、近所同士で起こされた裁判や事件発生などの例も把握しておくといいでしょう。

事実④：虐待は実際に起こっている！

事実の伝え方：

動物に対するいじめや虐待の例を、写真を使って伝えましょう。また連れ去りの事実もあることも伝えましょう。

飼育相談のアドバイス

問題を起こさないように管理する

動物のニーズを満たした上で、問題が起きないように動物の生活を管理しましょう。

動物の生活環境を変える、飼い主の行動を変える、人間と動物の生活の妥協点を見出す……そうして管理することで、困っていた問題を起こさずに済むのです。

以下に、その具体策を示しました。発想の転換をすれば、実はとてもシンプルな解決策です。参考にしてみてください。

外飼いの犬によくある問題を『管理』で解決！

通行人に向かって吠える



通行人が見えない場所に犬の居場所を移す、繋ぐ。

隣の家の人が出勤する時間に吠える



その時間だけ玄関に犬を入れる。

明け方にワンワン吠える



夜遅い時間に一度排泄をさせる（短い散歩）、可能なら玄関か土間に居場所を作り夜間だけ室内に入れる。

庭に出ると激しく興奮して飛びついてくる



散歩の時間を増やし、退屈しのぎができるおもちゃを一日何度も与える。

干してある洗濯物を引きずり落とす



洗濯物に届かない位置に犬を移動する。庭の中で犬を自由にできる場所を区切る。洗濯干しの周りだけ犬が入れないようにする。

庭を掘る



掘られてもいい場所に犬を繋ぐ。掘られたくない場所はフェンスで囲って犬の居場所と分ける。

脱走する



首輪のチェック、フェンスの高さ、すき間をふさぐなど、原因をチェックしてそれを改善する。

車をかじる



犬を繋ぐ場所を変えて車に近づけないようにする。

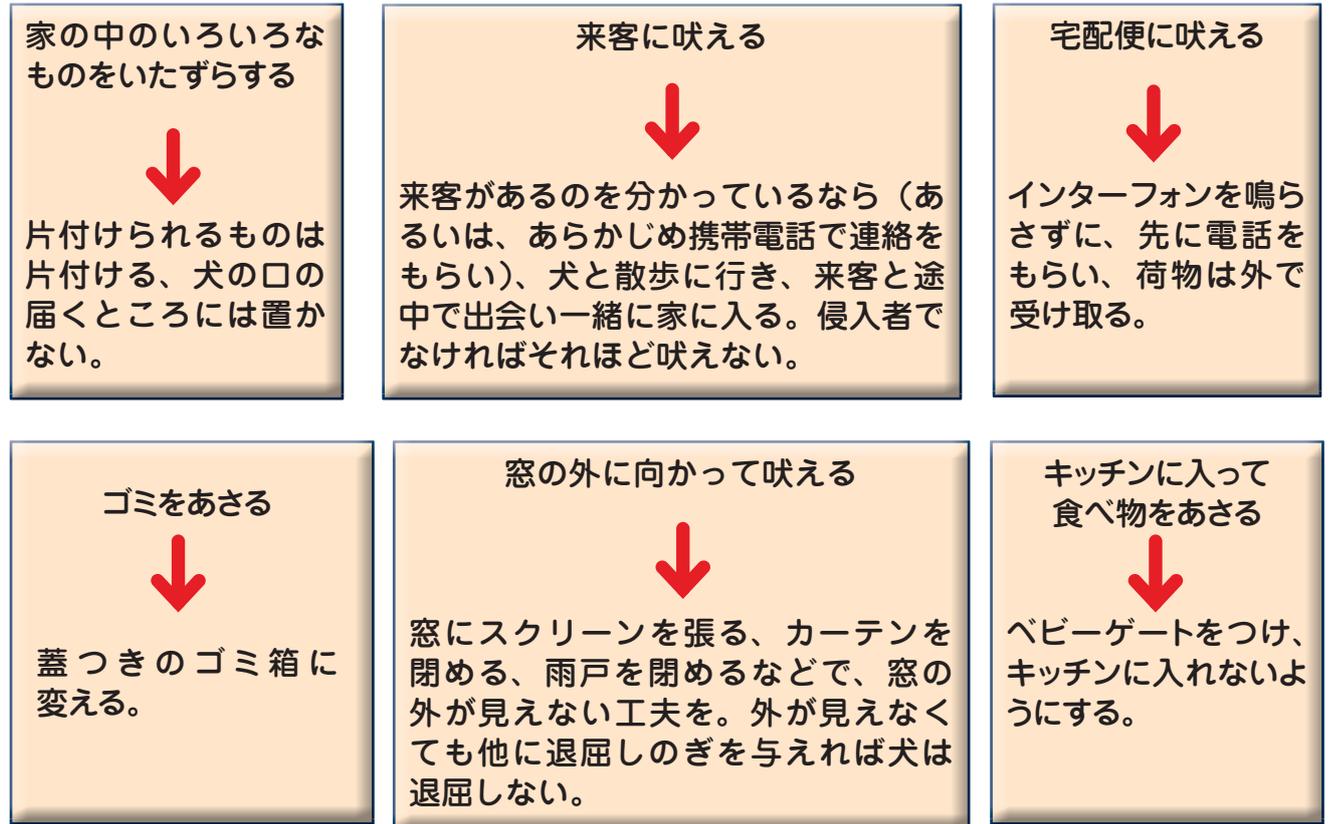


庭を掘るなら…

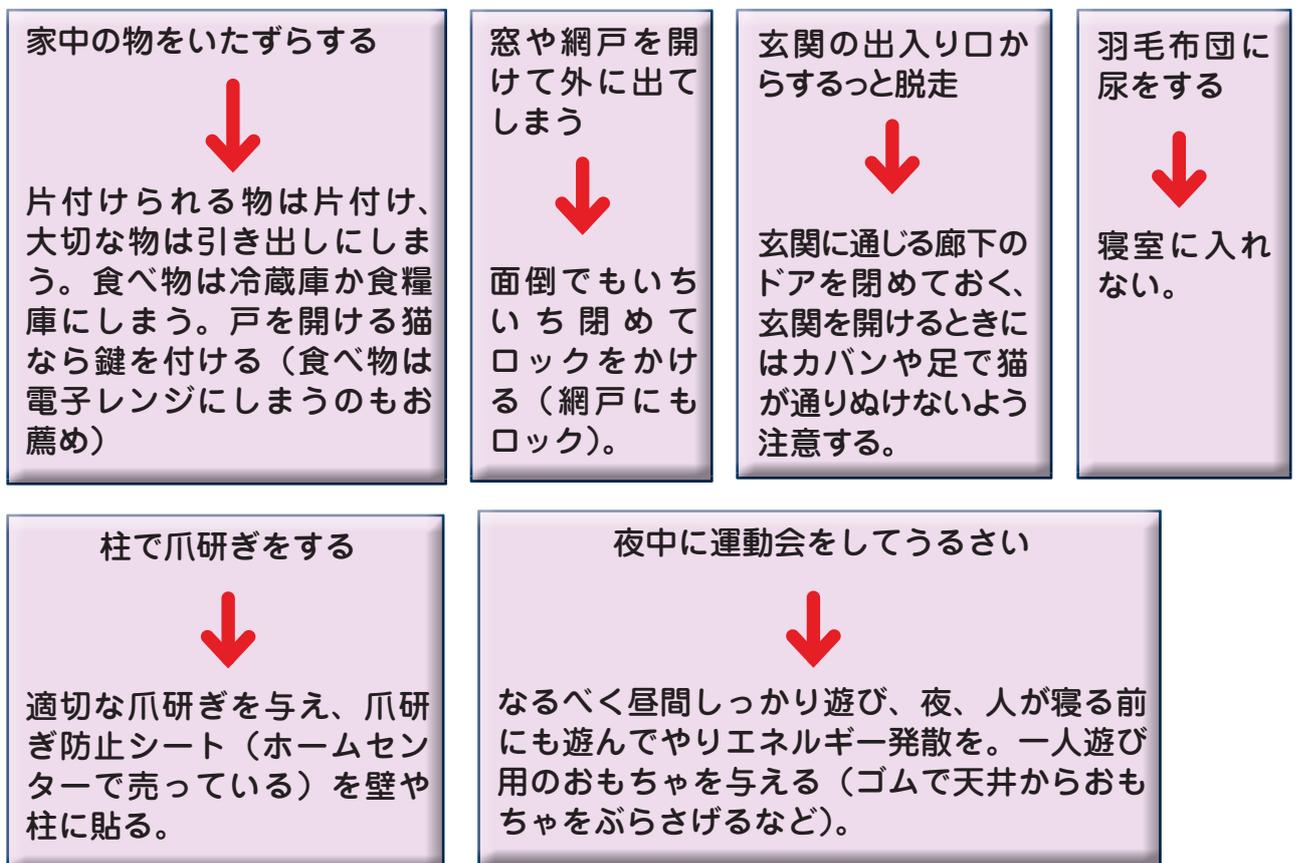


キッチンに入るなら…

室内飼いの犬によくある問題を『管理』で解決！



猫によくある問題を『管理』で解決！



飼育相談で大事な「姿勢」「質問力」「助言力」

譲渡後の飼育相談は電話の場合も多く、会話だけで正確に問題を把握できるのか、遠隔からの的確なアドバイスができるのか、難しい側面もあります。特に電話相談に役立つようなコミュニケーションのポイントを示しました。参考にしてください。

相談を受ける姿勢

どんな種類の相談も同じですが、相談者の気持ちに寄り添ってしっかりと話を聴く姿勢（＝傾聴）がまず求められます。人は、自分の話を真剣に聴いてくれた相手のことは信用し、相手の話も聴こうとします。まず信頼関係を築くことで、その後提示するアドバイスも受け入れてもらいやすくなるのです。

●傾聴のポイント

① 相手の気持ちに共感する

動物のことで悩んでいる気持ちを理解し、「共に解決策を考える」という姿勢を示しましょう。

② 相手を否定しない

話を聴く途中で、「なぜそんな対応をしたんですか、だから犬がますます悪くなったんです」などと、相手を否定したり、批判したりするとコミュニケーションの扉は閉じられてしまいます。

③ 適度なうなづき、あいづちで、相手の話を促す

特に電話の場合、「なるほど」「そうなんですか」といったあいづちで、相手は話を進めやすく感じます。

④ 要約しながら聴く

相談者の話を要約し確認しながら進めると、「分かってきている」と信頼も増しますし、限られた時間の中で話を前に進めることもできます。

例：「なるほど、猫が外に出たがっているけど、本当に室内だけでいいのか不安だと思っていらっしゃるんですね？」

質問力

限られた時間の中で問題の核心をつかむためには、どのような質問をしていくか「質問力」が問われます。実際の犬の状況を見ることなく、飼い主の言葉だけで正確な状況を把握することになりますから、適切な質問をしていくことが大切です。いったい何が問題なのか、具体的な質問で正確な情報を聞き取りましょう。

●質問を使い分けると、問題がクリアになる

オープンクエスチョン（自由な答えを引き出す質問～概要をつかむ）

例：「甘噛みは、その後どうですか？」

クローズドクエスチョン（はい・いいえで答えられる質問～核心に迫る）

例：「お母さんには甘噛みしますか？お子さんにはしますか？」



●大きな質問には、小さな質問で、細かな情報を得る

相談者は、ざっくりとした質問の仕方をしてくるものです。その大きな質問に対して、小さな細かい質問を返して、正確な状況を把握しましょう。そこから問題の原因が見え、具体的なアドバイスにもつながります。「無駄吠え」「いたずら」と言った言葉も、人によって想像する状況は違うものです。その共通項を見出していく作業でもあります。

例：相談者「無駄吠えがひどくて困っているんです、どうしたらいいですか？」

回答者「どんなときに吠えますか？」「吠える対象は人ですか、犬ですか？」

「吠える時間帯は決まっていますか？」「吠えたとき飼い主さんはどう対応していますか？」

助言力

アドバイスをするときも、相手が受け入れやすい表現で伝えましょう。相手に合わせたアドバイスを、相手に合わせた表現で伝える必要があります。

●否定や批判ではなく、建設的なアドバイスをする

これまで飼い主がとってきた対応に問題があるとしても、そこに固執して攻める必要はなく、これからどうしたらよくなるかを前向きに伝えましょう。

●「～すべきです」ではなく「～してみませんか？」

断定や命令ではなく、提案型の表現のほうが受け入れやすいものです。「なぜそれを勧めるか、どんなよい結果が期待できるか」を説明し、納得してもらうことが大事です。

●理解したかどうかを、随時確認

特に電話であれば、相手が理解したか納得したか、表情を読むこともできません。相手に確認しながら進みましょう。

例：「この方法はできそうですか？」

ときには、提案内容を相手にリピートしてもらおうと記憶に残りやすいでしょう。

例：「犬が吠えたときには、今日からどうするんですって？」

相談者に、必ずメモを取ってもらいましょう。

例：「メモを取っていただいてもいいでしょうか、ご用意ができるまでお待ちします。」

●具体的な情報提供を

効果的な道具を勧めるのであれば、その値段やどこで購入できるか、といったことも伝えましょう。相談者がすぐに実行に移しやすいような情報を提供をします。

●時間的な制限を設けてみる

人は「〇〇日までに」という締切があると、動くものです。

「明日の日曜日に、この道具を買いに行けますか？」「この方法を1週間やってみて、月曜に報告の電話をください」というように日時指定をしてしまうのも、提案を実行してもらおうよい方法です。

注：問題を解決したいというよりも、話を聞いてほしくて頻繁に長い時間電話をしてくるという相談者もいます。すべてに付き合えば仕事に支障が生じます。「今日は相談の依頼が多いので1件15分以内で、と決まっているんです、申し訳ありませんがご協力いただけますか？」というような表現で、まず最初に断りを入れてしまうのも一つの方法です。